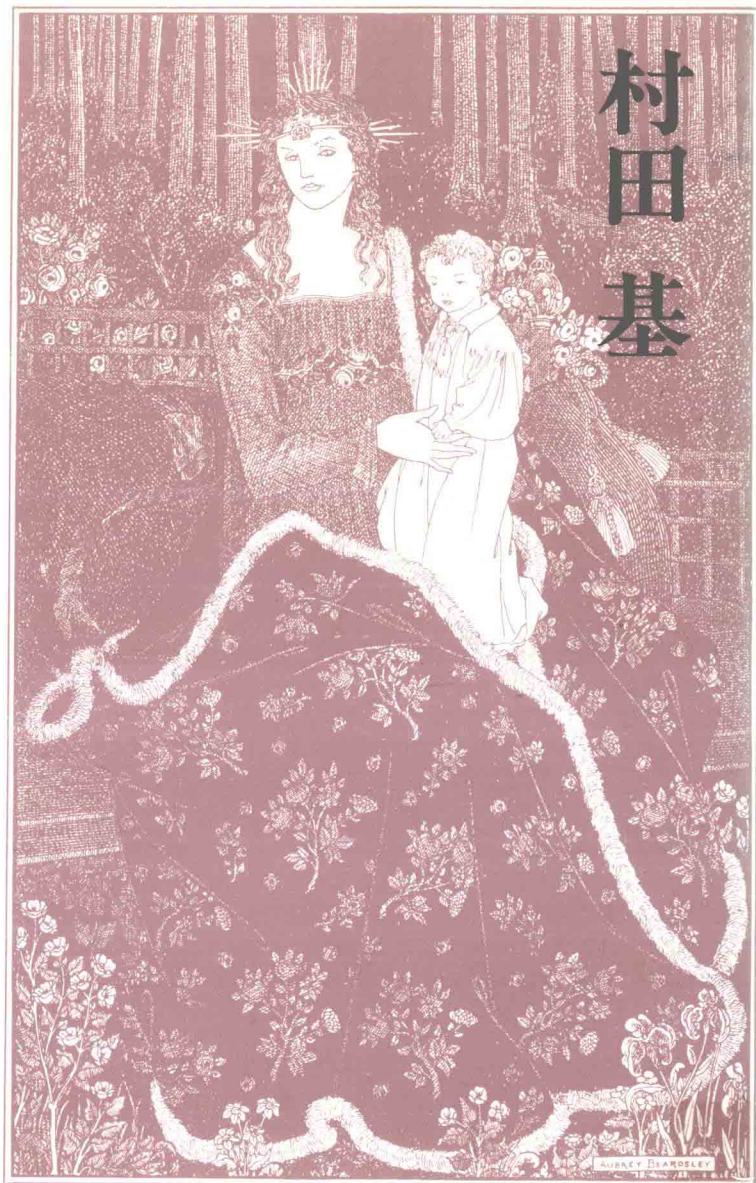


村田 基



フェミニズムの帝国

早川書房

村田 基

フェミニズムの帝国

早川書房

検印廃止

フェミニズムの帝国

一九八八年十一月十五日 初版発行
一九八九年二月二十八日 再版発行

定価 一四〇〇円

著者 村田 基
むらた もとむ

発行者 早川 清

発行所 株式会社 早川書房

郵便番号 一〇〇一

東京都千代田区神田多町二ノ三
電話東京(五三)三二二(大代表)
振替番号 東京・六、四七九番

乱丁・落丁本はお取替えいたしません

印刷・株式会社享有堂印刷所 製本・大口製本印刷株式会社

ISBN 4-15-203377-0 C0093

フェミニズムの帝国

第一章

思ひもかけない残業だった。

広い玄関ホールにはまったく人気がない。厚いドアガラスの向こうには、すでに濃い闇が降り立っている。

木下いさは、靴音を響かせてホールを一直線に歩いた。かすかなうなりを立ててドアが左右に開く。外へ踏み出す。冷えた外気が、ほてった頬に快い。

玄関の両側を、研究所直属のたくましい警備員が固めている。一人がちらりといさぎを見やり、おや、男か、という顔をした。

通りには人影はほとんどない。建ち並ぶビルも、窓の明かりを消して、闇の中に溶け込んでいる。ぼつりぼつりと設けられた街灯が、路上にぼんやりとした光を投げかけているだけだ。

いさは普段まったく残業をしないから、闇に包まれた街路を見るのは久しぶりだった。

ちょうど研究所の前を、一台のおんぼろ車が通りかかった。今にも壊れそうなへんなエンジン音を立てながら、のろのろと通りすぎていく。いさは、警備員がそれを真剣な目つきで見送っているの

に気づき、少し緊張した。

このごろ治安状態が悪化し、ことに夜になると危険だといわれる。

いさぎは足早に駆へと向かった。

警備員の目の届かないところまでくると、急に不安になり、周囲に目を配りながら歩いた。

十月の初めにしては、風が肌を刺すように冷たい。

だが、いさぎは寒さを感じるどころではなかった。歩くに従い、心の中の屈辱感と腹立ちがしだいに熱く燃えさかってきたからだ。

今日の午後三時、いさぎは上司の秘書課長から、経理課への配置転換をいい渡された。それも、明日の朝から経理課で勤務できるようにというのだ。

そんな突然の人事異動は前例がなかったし、緊急に異動すべき理由があるとも思えなかった。

「どうしてですか」といさぎは課長に食ってかかった。「なにかばくに落ち度でもあったんですか」

課長は、大学時代バレーボールの選手だったという長身の三十三歳の女性だ。

「落ち度とか、そういうことじゃないのよ」

「では、どういうことなんですか」

「研究所としての方針。それだけよ」

「理由を教えてください」

「いちいち教える必要はないわ」

「どうして教えられないんですか。それでは納得がいきません」

「あなたには関係ないことよ」

なおもいさがが食い下がり、押し問答を繰り返していると、課長は突然声の調子をぞんざいにして「あのね」といいながら、椅子を回していさがと向き合い、少しスカートを引っ張っておもむろに足を組んだ。そして、乳房を突き出すように胸を張り、悩ましい目つきでいさがの目をのぞき込んだ。「いい若い男の子がそんな聞き分けのないことをいうんじゃないの。これはちゃんと上のほうで考えて決めたことなんだからね。男らしく素直に従いなさい。わかった？」

その悩ましい視線から逃れようと目を伏せると突き出した胸があり、さらにスカートのすきまから太股の奥のほうまで見えそうになって、いさはどぎまぎした。

「いえ、あの、従わないとかじゃなくて、できたらわけを聞かせてもらえないかと」

「まだそんなことをいつてるの。かわいくないわよ。あなたはいくつだったっけ」

「二十四。先月なったばかりです」

課長は膝小僧がさらに高くなるよう深く足を組んだ。ふくらはぎの肉が横にふくれる。いさはますます居心地の悪い思いがした。

「もうそろそろ結婚でしょう。今のうちから男を鍛えておかないと、結婚してから困るわよ」

それから男の生き方に関する説教になり、おとなしく聞いているうちに、強く主張できない雰囲気になってしまって、結局理由がわからないまま異動させられることになった。仕事の引き継ぎをし、経理課のほうに机を用意してもらって、私物をまとめて運んだりしているうちに、こんな時刻になってしまったのだ。

いさは、課長のやり方に改めて腹を立てた。「あのね」といったのをきっかけに、突然課長から女に変身したのだ。部下を押さえ込むのに女であることを利用するなんて……実にきたないやり方だ。

いさぎはそう腹立ちを覚える一方、相手に女を感じたとたんにうろたえて、なんでもいいなりになつてしまふ自分自身が情けなくなつてならなかつた。

配置転換の通告を前日にするなんて、どう考えても不当だ。だが、組合だって、いさぎのような若い男のことには真剣に取り組んでくれないに決まっている。

自分の靴音だけがうつろに響く。夜遅いビジネス街はほとんど無人の街だ。紙切れが風に吹かれていさぎを追い越していく。印刷された文字が読めた。

たくましい男は美しい

男性解放運動のビラだ。そういえば、今日の昼間もデモがあつた。

たくましい男は美しい——この言葉はいさぎの胸に響いた。いさぎは別にスポーツもしないのにたくましい体をしていて、小さいころからずっと劣等感を覚えてきたのだ。

この言葉が時代の価値観になればいいのに——。

このところ男性解放運動がかつてない高まりを見せていた。世紀末になつたということが、人々の意識に微妙な変化を与えているのかもしれない。

今年（西暦一九八八年）は西暦二一九八八年。二十二世紀もあとわずか三年だつた。

だが、まだまだ世の中の大勢はかわらない。社会のあらゆる実権は女が握っている。

男は結婚して家庭に入り、家族に尽くすのが義務とされる。二十五歳をすぎても結婚しない者は、ハズレ者といわれて世間からつまはじきされ、まともな職にはつけず、水商売などに従事して生きる

しない。

ハズレ者がある分、結婚できない女もいるわけで、それはアブレ者といわれて、欲求不満のため粗暴になった。

このごろハズレ者とアブレ者がふえてきており、それが治安の悪化した理由だった。

ハズレ者になるほどの覚悟のない普通の男は、女にかわいがられなければ生きていけない。そのためには、おとなしく素直でなければならぬのだった。

いさががそうして悔しさをかみ殺しながら駅に向かって歩いてみると、「助けて」というかすかな叫びが聞こえた。ちょうどいさがが通りがかったところの横道からだ。

いさがは立ち止まって、耳をすました。だが、もうなにも聞こえてこない。気のせいだったのだろうか。

その横道は三メートルくらいの幅で、なだらかに下へ傾斜していつている。まったく明かりがない。表通りの街灯の光がわずかに差し込んでいるその向こうは、まさに漆黒の闇だ。

このあたりはビルが雑然と建っていて、狭い道が入り組んでいる。

いさがは一人が入っていくのにためらいを覚えた。周りを見回してみるが、かなり後ろに、男と思われる人影がひとつ見えるだけだった。

ここから奥に向かって大きな声で呼びかけてみるか。あるいは、なにも聞かなかったことにしてこのまま通りすぎてしまうか。あるいは――。

いさがは足音を忍ばせて横道に踏み入った。

必ずしも真っ暗なわけではない。星明かりもあるし、ところどころにビルの入口の外灯や非常灯が

ともっている。ということ、自分の姿も見えてしまうわけだ。いさぎはいっそう足音を忍ばせた。

両側は、四、五階くらいの小さなビルばかりで、大部分は老朽化している。廃ビルも多いはずだ。ビルとビルの間の、人ひとりがやっと通れそうなすきまは真っ暗で、いかにも気味が悪い。

かすかな話し声が聞こえた。

声の調子からは異常なものは感じられないが、いさぎは警戒をゆるめず、その声のほうへと接近していった。しだいにはっきりと聞こえてくる。女の声だ。二、三人いる。

見えてきた。ビルの裏側の非常階段の下だった。三人の女がうずくまってなにかしている。

「ズボンは全部脱がせないの。そう、そこまで。そうすれば暴れられないでしょ」

「こわがらせちゃだめよ。やさしくするのがこつなんだから。あんたもうちちょっと力をゆるめて。さ、やってごらん」

「ごそごそと一人が動く。」

「こんなのでいいの？」

「そう、その調子。もっと動きに変化をつけて」

それからしばらく沈黙。

「ほらね」

「こんなに」

「もっと大きくなるわよ」

「ほんとだ。すごい」

くすくす笑い。

「簡単でしょ。男なんて、すました顔してても、みんなこんなもんよ」

「最初はわたしだからね」

男が一人、押さえ込まれていた。三人がかりでレイプしようというのだ。

いさぎは自分がレイプされているような怒りを感じて、思わず「やめろ」と声を出してしまった。

三人はびくっとし、いさぎのほうを見た。いさぎはじっと立っていた。三人が逃げ出すかもしれないとかすかな期待は裏切られた。二人がこちらに向かってきた。残った一人は男を押さえている。こちらに向かってくる二人は、固太りの体をしていて、とりわけ腕と肩がたくましい。年は三十代か四十代。暗くてはっきりしないが、凶悪な雰囲気を発散させている。アブレ者に違いない。

いさぎはあとじさった。表通りからかなり入り込んでいた。逃げても逃げ切れそうもない。

二人は何度も周りを見回して、いさぎ一人だと見きわめをつけたらしい。

「飛んで火に入る夏の虫とはこのことだね」

「けっこういい男じゃない」

二人はいやらしい笑みを浮かべながら、ゆっくりと近づいてきた。いさぎは自分の愚かさを激しく悔やんだ。大声を出して助けを呼ぼうと思った瞬間、その気配をかぎとってか二人はいつせいに飛びかかってきた。

まず口をふさがれた。口をふさいだ女は後ろに回り、もう一方の腕でいさぎの首を絞めた。もう一人の女はいさぎの胸に抱きついた。

いさぎはなんの抵抗もできなかった。体に力が入らない。恐怖で体がこわばっているのだ。そのままずるずると奥へ引きずられた。

そのとき、鈍い衝撃があつて、胴に抱きついてた女がすつ飛び、ビルの壁にたたきつけられた。いつのまに現れたのか、一人の男が立っていた。その男が女を蹴ったのだ。

後ろからいさぎの首を絞めていた女は、いさぎをほうり出した。いさぎは路上に転がった。

その女は男にゆっくりと向かつていった。自信のある動きだった。男に負けるわけがないと思つてゐる。だが、そこに油断があつたのかもしれない。男がくり出したパンチがもろに女の顔面をとらえた。さらに一発。そして、脇腹に渾身の力を込めた蹴りが入った。女は一瞬体を浮き上がらせてからどつとコンクリートの路上に落ち、苦しそうに体を丸めた。

いさぎは倒れたまま、信じられない思いでそれを見ていた。こんな強い男がいるなんて――。

ビルの壁にぶつけられた女が体勢を立て直し、それに、さっきまで男を押さえつけていた女も加わつて、二人して男と向き合つた。今度は女たちも警戒している。

男はかなり背が高く、やや細身ながら強靱な筋肉を秘めた体つきだ。表情は暗くてわからない。二人を前にして、ただじつと立っている。

勝負はあつてなくつた。一人の女が先に行動を起こしたが、男はそれをかわし、そのあとは、男のこぶしと靴先が女たちの肉にめり込み、骨を打つ音が響いて、二人の女はたちまち路上に転がっていた。

いさぎはのろのろと起き上がった。状況がうまく把握できない。

「大丈夫か」と男はいった。

「ええ」

いさぎは自分がほんとうに助けられたことがわかつて、安心してズボンの汚れを払つた。

「どうしてこんなところに入ってきたんだ」と男はいった。

「助けてという声を聞いたんです。そこで誰かが襲われていて——」

いさぎは非常階段の下を見たが、レイプされかかっていた男はすでにいない。

「そういえば、一人向こうのほうへ逃げていったな」

女の一人がうめき声を出した。

「そろそろ起き上がるな。その前に退散するか」

いさぎは男と肩を並べて歩きながら、助けてもらったことの礼をいった。

表通りに出た。相変わらず人通りはない。

街灯の光のもとで改めて見ると、その男は、いさぎがこれまでに見たこともないような独特の雰囲気をもっていた。

背が高く、骨太で、筋肉質で、肌は浅黒い。顔の造作も精悍なものを感じさせる。こうしたタイプは一般に、劣等感からくる暗さをもっているものだが、彼の場合はそれがまったくない。むしろ自信に満ちているように見える。

年齢は三十歳前後というところだろう。だが、背広もネクタイもしていない。灰色のジャンパーに枯れ草色の厚手のズボンをはいている。ただのハズレ者ではなく、男性解放運動をやっている者だろう。

男も駅のほうへ行くらしく、二人で並んで歩き出した。

「おれは氷上ただしというんだ。お前は？」

いさぎは「おれ」という言葉にショックを受け、うろたえた。

「ぼ、ぼくは木下いさぎです」

「このごろアブレ者は凶悪になる」方だからな。注意したほうがいいぞ。なんだってこんな時刻になつたんだ」

「ちょっと残業があつて」

「男でも残業させられるのか」

「今日は特別なんです」

「どんな仕事をしているんだ」

配置転換になつたので、一瞬どう答えるか迷つた。

「普通の事務です」

「男が働くのはなにかとたいへんだらう」

「ええ」

「たいした仕事はさせてもらえないし、結婚すればそれまでだからな」

そのとき、いさぎはふと不審に思つた。なぜどこに勤めているかとたずねないのだらう。

考えてみれば、この氷上ただしという男はなぜあそこまで助けにくることができたのだらう。おそらくあのとき後ろのほうに見えた人影がこの男だったのだらうが、「助けて」という叫びはあそこまで聞こえなかつたはずだ。

もしかすると、いさぎが研究所を出たときからあとをつけていたのではないだらうか。

氷上はそれからいろいろ話しかけてきたが、むりに猫なで声を出しているような感じがある。いさぎはいまいちな答えを返して、話に乗らなかつた。

やがて氷上は話しかけるのを諦め、しばらく沈黙のまま二人は歩き続けた。だが、助けてもらった恩義もある。今度はいさぎのほうから話しかけた。

「氷上さんはとても強いんですね。まるで女みたいだ」

氷上は笑った。

「女みたい、か」

いさぎはばかにされたような気がした。

「だってそうでしょう。三人もやつつけるんだもの」

氷上はいさぎの体をじろじろと見た。

「お前だって、その気になればあれぐらいの女には負けないんだぜ。力はお前のほうが強いはずだ」

「まさか」

「ほんとうさ。おれがけんかのしかたを教えてやろう」

また「おれ」だ。この男はいつたいうかという育ちなのか。

おれというような下品で荒っぽい言葉は、あまり育ちのよくない男が、よほど腹を立てたりしたときに使うくらいだ。もうほとんど死語と化している。その言葉を氷上はどうやら常用しているらしい。

「要するに、皮膚と皮膚が接触しないようにしてやればいいんだ。組みつくのもだめだ。ひっかかれたり、かみつかれたりするからな。だから、殴るか蹴るかだ。ただし相手の顔は殴らないように。おれはいつも手袋をしているからいいが」

氷上は手を見せた。目立たない肌色の手袋をしている。

「相手の顔を攻撃したいときは——すぐ近くに寄られたときなんかそうだが、こうやって（と彼は

動作をした）肘で打つんだ。肘なら服で守られているからな。こぶしで殴るのなら相手の服を着た部分だが、ま、効果があるのはみぞおちぐらいだ。あと、ここ、レバーだな。しかし、ある程度離れているのなら、殴るよりは蹴るほうが効果がある」

それから彼は、型を示しながら説明した。硬い靴をはいていればつま先で蹴ればいいが、そうでないとつま先を痛める恐れがあるので、足の甲で蹴る、正面に向かって蹴り上げる場合は足の裏を使う、といった具合だ。

実に熱心な口調で、彼は本来の自分に返ったようにいきいきとしている。

いさぎはとまどいながら聞いていた。なるほどさっきのようなこともあるから、護身術として知っておいたほうがいいのかもしれないが、やはり男としてそんなことはとてもできないと思う。

だが、氷上という男には、ある種の好意を感じた。

けんかするのも、おれという言葉を使うのも、ここまであっけらかんとしてやられると、なんだかそれでいいような気がしてくる。

いさぎは氷上に興味を感じて質問してみた。

「氷上さんはメنز・リブの運動をやっているんですか」

「ああ」

「どんな主張なんです」

男性解放運動といってもひとつではなく、過激派から穏健派まであり、その主張もさまざまだった。男も結婚後も働けるようにという主張がだいたい中心になったが、男の家事労働に正当な報酬を、というのあれば、妻の暴力に苦しむ夫を救済する運動、男もスカートをはく運動などというのまであ